

蘇我氏と飛鳥時代

目次

まじめに

- 1, 飛鳥について
- 2, 蘇我氏（そがし）のルーツ
- 3, 葛城（かつらぎ）氏、大伴（おおとも）氏、物部（ものべ）氏、と蘇我（そが）氏の関係
- 4, 蘇我氏の専権
- 5, 蘇我氏、推古天皇と厩戸皇子の三者体制
- 6, 専権蘇我馬子・入鹿体制の崩壊

おわりに

はじめに

飛鳥（あすか）時代の時代区分は大雑把に言って古墳時代の後になります。ただ、古墳時代の呼称は文化史の名称ですので、晩期は政治史区分の飛鳥時代と重なります。

飛鳥時代の区分を6世紀末から8世紀初めの平城京への遷都までの言い方を
する人も多いのですが、ここでは更にきっちりと定めましょう。

即ち女帝で有名な推古（すいこ）天皇即位（592年）から同じく女帝の元明（げんめい）天皇の平城京遷都（710年）としましょう。118年間です。

飛鳥時代の前の古墳時代の始まりについてです。倭国女王卑弥呼（ひみこ）
又は後継者の同じく女王台与（とよ）のどちらかの古墳と言われています大型
の前方後円墳の箸墓（はしはか）古墳からです。3世紀末に造られ現在も奈良
県桜井市に残っています。

この古墳以降4～6世紀にかけて前方後円墳を中心とする古墳が全国の大和
朝廷の統治下に多数造られました。

各地に大型の前方後円墳が残っており、特に近畿地方の大型古墳は有名です
ね。大型古墳としては大阪府堺市の仁徳天皇陵と言われている大山（だいせん）
古墳が有名です。

しかしこの大型の古墳築造の時代が終息します。100メートルを超える前

方後円墳は欽明天皇の陵墓と言われる梅山古墳（明日香村）で最後でしょう。

娘の推古天皇からは薄葬儀礼が慣習となります。

飛鳥時代の時代の始まりは大王の宮（住まい）は飛鳥の地に多く建てられたことから（首都）と共に大型の古墳（墓）が建造されなくなり、大型の建造物は寺に代わって行く時代とも言えます。古墳時代の終わりとも言えます。

尚、当時天皇は天皇と言わず大王（おおきみ）と称しましたがここでは両方で記述します。さらには天皇名は和風諡号^{わふうしごう}ではなく漢風諡号^{かんふうしごう}とします。例えば推古天皇と表し、和風諡号の豊御食炊屋姫尊（とよみかげしきやひめのみこと）と記述しません。

1、飛鳥について

飛鳥時代の飛鳥は（大和）奈良盆地の南部にある地名です。現在の奈良県高市郡明日香村大字飛鳥あたりを中心とする所です。飛鳥寺を中心とするその周辺です。

飛鳥時代の飛鳥はここから取ったものですが、飛鳥時代の大和王朝の大王の宮の群はさらに広い範囲となります。

ここで別紙「奈良盆地と京都盆地の地勢」と「飛鳥・藤原京略図」をご覧ください。

当時は香具山以南から橘寺あたり以北南北3キロメートルの飛鳥川右岸（東岸）東西0,8キロメートルの幅の地域をも飛鳥と呼んでいました。

飛鳥時代と称する飛鳥は更に広く別紙「飛鳥・藤原京略図」の範囲となります。

“あすか”は古事記、日本書紀では飛鳥の字を当て、万葉集では明日香の字を当てます。ここでは飛鳥とします。

“あすか”のスカは砂地の意味でアは接頭語とされています。

それから遠飛鳥（とおつあすか）とか、近飛鳥（ちかつあすか）と言いますが遠飛鳥が大和の飛鳥のことで、一般的に言って飛鳥とはこのことです。

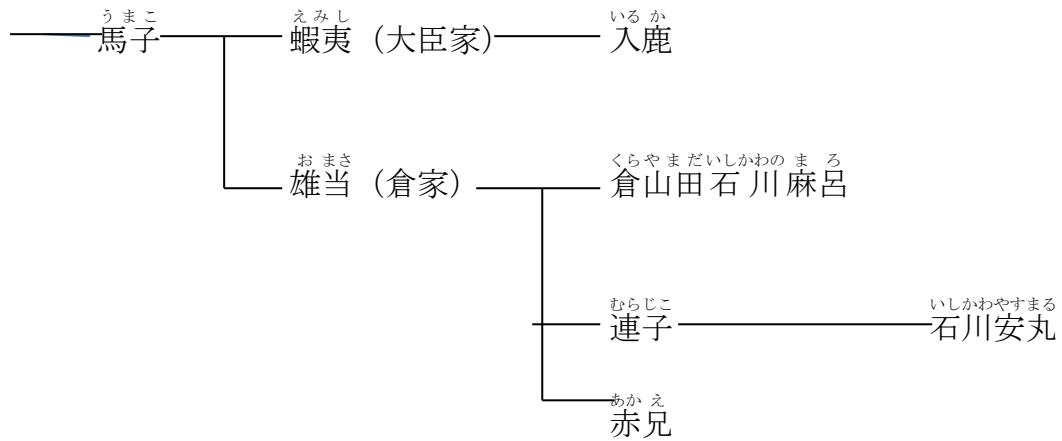
ここでも大和の飛鳥をとりあげます。

尚、近飛鳥は河内国の飛鳥のことで23代顕宗（けんぞう）天皇が本拠とされた地と言われています。現在の大阪府羽曳野市飛鳥です。

2、蘇我氏（そがし）のルーツ

系図は次の通りです。

そがのまち 蘇我満智 — からこ 韓子 — こま 高麗 — いなめ 稲目



蘇我氏は稲目（いなめ）、馬子（うまこ）蝦夷（毛人・えみし）、入鹿（いるか）の4代が活躍して、歴史上の人物になりました。

天皇の権力を上回る剛腕の入鹿が中大兄皇子（なかのおおえのおうじ、後の天智天皇）と中臣鎌足（なかとみのかまたり）に暗殺され、父親の蝦夷も討たれ蘇我本宗家は滅亡します。

家臣筆頭は中臣（藤原）鎌足となり、このお家は特に平安時代隆盛で、以来江戸時代まで摂政関白家として地位を保ちます。

蘇我氏は鎌足以前に筆頭家臣の地位にあった家です。

そもそもどんな家柄なのかですが、稲目以前の5世紀代についてははっきりしません。

稲目以前は満智（まち）—韓子（からこ）—高麗（こま）—稲目（いなめ）となります。

満智、韓子や高麗は朝鮮半島系の名前だとして渡来人説もありますが、現在は葛城氏の一族との説が有力です。

3、葛城（かつらぎ）氏、大伴（おおとも）氏、物部（ものべ）氏と蘇我（そが）氏の関係

葛城氏は大和盆地南部の西側に本拠を置く豪族で、一時は大和王朝家と勢力を二分すると言われて言いましたが、5世紀末に雄略天皇によって討滅されました（葛城一族は中小貴族として続きます）。

この葛城氏滅亡後、勢力を上げてきたのが大伴氏と物部氏です。両氏の後に

蘇我氏が家臣筆頭となるのです。又その後は中臣氏(藤原氏)です。奈良時代、特に平安時代から摂政関白で江戸時代まで大王家(天皇家)筆頭の家臣でした。

大伴氏です。

5世紀中葉に台頭し、葛城氏滅亡後26代継体天皇、27代安閑天皇、28代宣化(せんか)天皇時代は大伴・物部の大連(おおむらじ)体制でしたが、29代欽明天皇時代の6世紀中頃に大伴氏(金村)は朝鮮半島に関する失政で失脚します。

一方蘇我稻目(そがのいなめ)は5世紀末頃より頃頭角を表し、宣化(せんか)天皇時代の6世紀半ばごろに大臣となります。

物部氏は大伴氏と同じごろに台頭し、大伴氏と二代巨頭でしたが、大伴氏失脚で、蘇我氏と組んで朝廷でトップにつきます。

しかし31代用明天皇の時に、仏教賛成派の蘇我馬子と仏教反対派の物部氏が衝突し物部氏(守屋)は滅びます(587年)。しかし主要因は欽明(きんめい)天皇の後継問題が原因と言われています(穴穂部皇子を推戴した物部氏と用明天皇、崇峻天皇を推戴した蘇我氏との抗争が原因)。

これで蘇我氏は大伴と物部の二人の大連(おおむらじ)が滅亡で大臣として朝廷を仕切る立場になりました。

4、蘇我氏の専権

朝廷での実権移動の概括は上記の通りですが、更に蘇我氏の実権掌握の過程を蘇我氏と大王家との婚姻関係から見てみます。

蘇我氏の出自は大和国高市郡曾我です。大和盆地の南部で、^{うねびやま}畝山の西北麓です。大豪族葛城氏とはその領域で南側で隣接しています。

ここからも自らを葛城氏の一族と称しています。

大和王朝の家臣の構造は、大和を含む元々地域豪族であって大王家の日本国内制覇で服属して家臣になった者と、大王家の元々の家臣で大王家の軍事、祭司、財政を担当した者に分類されます。

元々の地域豪族は許されて自分の私領地の支配を許されます。県主(あがたぬし)、首(おびと)、君(きみ)と言われ、中央で役職につくと臣(おみ)とよばれました。

臣は葛城氏、蘇我氏、巨勢(こせ)氏、平郡氏、阿倍氏、紀氏等で、それに

最高位の大連（おおおみ）についたのが蘇我氏です。

元々からの家臣は伴造（とものみやつこ）と言ひ、大王家の各種の職能を管理する地位にありました。

上級職の連（むらじ）には大伴氏、物部氏、中臣氏、土師氏等で。最高位の大連（おおむらじ）には大伴氏と物部氏がつきました。

しかし上記のように大伴氏も物部氏も失脚しましたので、大連不在で家臣の最高位は大臣の蘇我氏（馬子）一人となりました。

それでは更に詳しく蘇我氏の発展過程と滅亡を見てみます。

実質初代の稲目（いなめ）は宣化（せんか）天皇の時代の西暦536年に大臣に初めて任命され、次の欽明天皇の時も再任されました。

生年は不明です。大臣就任は大王家の財務担当として、又東漢氏（やまとのあやし）傘下の渡来技術集団を葛城氏本宗家滅亡の後を引き継ぎ、大王に貢献したことによるものと言われています。

財務担当として大王家の資産の増、渡来技術団による刀等鉄製品の生産、織物生産、土木技術、装飾品作成での貢献です。

稲目が娘の堅塩媛（きたしひめ）と小姉君（おあねのきみ）を欽明（きんめい）天皇の妃に入れます。

堅塩媛の子に後の用明天皇と推古（すいこ）女帝が生まれます。そして小姉君の子に後の崇峻（すしゅん）天皇が生まれます。（女性天皇は女帝と記述します）

稲目は欽明天皇の時代の570年に没し、後は嫡男の馬子が蘇我氏の当主となります。

欽明天皇の後の敏達、用明、崇峻、推古天皇(女)の大臣に任命されます。

ややこしいので別紙系図「蘇我氏と天皇家姻戚関係図」をご覧ください。

敏達天皇の妃には後の推古（後の女帝）（欽明と稲目の娘の堅塩媛との子、母違いの兄妹婚）です。次の用明天皇は同じく堅塩媛堅塩媛（稲目の娘、馬子の妹）と欽明の子です。その次の崇峻天皇は小姉君（稲目の娘、馬子の妹）です。

その後の推古女帝は上記の通り稲目の娘堅塩媛の子で馬子の姪です。

歴代の四人の天皇は馬子の二人の妹絡みで大王家の甥・姪の外戚となり権力基盤を強固にします。

用明天皇の時代に大連物部守屋を討滅します。物部本宗家の滅亡です。大

連の職位はなくなりました。家臣トップは大臣の馬子だけです。更に蘇我氏の基盤は強固になります、

敏達、用明の兄弟の天皇は若死にでした。

馬子は甥の崇峻天皇を擁立したのですが、この天皇が“馬子を断つ”との言を伝え聞き、崇峻天皇を弑逆します（592年）。

天皇暗殺には後に擁立される推古女帝や厩戸皇子（聖徳太子）も絡んでいたとの話があります。

5、蘇我氏、推古天皇と厩戸皇子の三者体制

崇峻天皇暗殺後はスムーズに次期政権基盤が出来上がりました。推古女帝、馬子大臣、聖徳太子の三者体制です。崇峻天皇暗殺での協同の絡みがあったのでしょう。

ここから飛鳥時代と言っています。

推古女帝は住まいを豊浦宮そして、そこを移って小墾田宮で両宮は本来の飛鳥でなく飛鳥の近接の地ですが広い意味での飛鳥の地です。馬子が自分の邸宅をさし上げたのです。

推古女帝の体制は592年から女帝没の628年の36年間です。

朝鮮半島は百濟、高句麗、新羅で互いに争っています。百濟からは援軍要請があります。

中国は統一王朝隋に続いて唐が建国されます（589・618年以降の中国の統一政権は強力で脅威です）。日本は遣隋使、遣唐使を送って友好関係を築こうとします（607年以降数度）。

日本国内の体制整備を急ぎます。

これまでの豪族たちの連合による大和王朝ではなく、大和王朝の専制体制を築いて体制の強化を図るのです。

即ち大王（天皇）—大臣—家臣—民の序列の明確化です。

冠位十二階、憲法十七条の制定は大和王朝の体制強化のためです。

次に蘇我馬子と聖徳太子による仏教の振興です（飛鳥寺、法隆寺の建立等）。

仏教を取り入れた欽明天皇から崇峻天皇まで皇室が自ら振興の旗振りをせず、蘇我氏にまかせていました。

物部氏等の仏教反対勢力もあり、自らは皇祖神を祭らねばならないとの意識があったのでしょう。

しかし中国でも朝鮮半島でも政権は仏教を取り入れており、これに付随す

る新しい文明技術を輸入する必要があります。建築、製鉄、土木、工芸等の技術です。それまでの渡来人を上回る技術の輸入が求められます。

日本の神信仰は、大王家も豪族たちもそれぞれの氏神様を祭ります。統一した神ではありません。仏教はこの世の王一家臣一民の縦関係を認めます。大和王朝の統一の指針の裏付けが出来ます。特に大王と家臣の関係は連合ではなく、はっきり上下関係になります。

更に日本の神にはないこの世での教え、導き、あの世の事について教えがあります。もちろんこの世での頼みも聞いてくれます。日本国で上下統一した信仰心ができます。

推古女帝から大王家も自ら仏教の振興をはかります。

蘇我氏建立の飛鳥寺に対応して、徳太子に法隆寺を建設させたのはその一環です。

上記政策を進める推古女帝時代は安定政権時代とも言われますが、そうでもないようです。

推古、馬子、聖徳太子は最初は三者協同でしたが、推古女帝と聖徳太子にとって馬子は実力者の外戚であっても、大王家が単独での専制統一政権でなくてはならないと考えるようになりました。

馬子は大和朝廷の下で蘇我家は特別の存在で一般家臣とは別格であるとの主張を強くします。

大王家の直轄地で、もと葛城氏の領地であった葛城県を自分は葛城氏の嫡流だとして蘇我氏の領地にしたいと推古天皇に要求します。しかし却下されます。

推古と聖徳太子は飛鳥以外にもう一つの拠点を斑鳩（いかるが）の地に設けることにします。

聖徳太子に築かせ、太子の宮とさせます(601年)。この地は法隆寺建立で有名ですが、実はここは飛鳥と難波（現大阪）を結ぶ大和川の飛鳥側の出入り口で、飛鳥への水運の外港としての重要拠点なのです。

ここを聖徳太子に支配させ馬子の対抗勢力にしたのです。

それでも大王家と蘇我氏は協調体制で一応無事に進みます。

622年に聖徳太子が没し、626年に馬子が没します。馬子の後は嫡子の蝦夷（毛人・えみし）が後を継いで大臣になります。

6、専権蘇我馬子・入鹿体制の崩壊から新体制へ

推古女帝は628年に亡くなる時に次期天皇の指名についてあいまいでした。後継が聖徳太子の子の山背大兄王（やましろのおおえのおう）か敏達

天皇の孫の田村皇子かはっきりしないまま亡くなりました。大臣蘇我蝦夷が田村皇子を推戴し舒明（じょめい）天皇の即位となりました（629年）。

舒明天皇の皇后は舒明天皇の弟茅渟王（ちぬのきみ）の娘宝皇女（後の皇極女帝）です。

蝦夷の妹の刀自古郎女（とじこのいらつめ）と聖徳太子の間に生まれた山背大兄王の擁立を避けたのは、蝦夷はこれまでの大王家と上宮家（聖徳太子—山背大兄王）との連携を嫌ったのででしょう。蘇我氏の権力が弱まるのが想定できるからです。

舒明天皇は641に没します。年在位12年です。

後継は舒明の皇后の宝皇女、即ち皇極女帝です。舒明の指名と言われていきます。舒明には宝皇女とは別に馬子の娘法堤郎女（ほほてのいらつめ）を妃としており、その間に古人大兄皇子（ふるひとのおおえのおうじ）がいましたが、年が若かったので後継天皇に出来ません。舒明と蝦夷は古人大兄皇子へのつなぎの役として皇極女帝を擁立したのです。

山背大兄王は今度も外されました。

この頃蝦夷は息子の入鹿（いるか）に後を継がせるべく工作をし、入鹿に政治を任せる体制をとっていました。

本人の体調も良くなかったのででしょう。それよりも蘇我宗家の次期当主を我が子に決めておきたかったのででしょう。

入鹿は次の次期天皇として古人大兄皇子王を持つてくることを確実にするために山背大兄王子の上宮王家の勢力を一掃するとの念が強くなり、ついに斑鳩（いかるが）に山背大兄王を急襲して殺してしまうのです（643年）。

蘇我本宗家の朝廷での力は他の豪族を圧倒し、入鹿の専横は大王家をしのぐ権力となって行ったのです。

これに対し、入鹿と蘇我本宗家の打倒と王権の確立を目論む勢力が裏で結集していました。

皇極女帝の息子の中大兄皇子（なかのおおえのおうじ）とその一派です。

645年百済、新羅、高句麗の使者が大極殿で皇極女帝との謁見の場で中大兄皇子とその一派は入鹿の暗殺を実行したのです。

父親の蝦夷は甘櫛^{あまかしのおか}丘の自邸で自尽しました。クーデター（乙巳^{いつし}の変）は成功しました。

蘇我本宗家は壊滅しました。

中大兄皇子の相棒には後年名をはせる中臣鎌足（なかとみのかまたり）がい

ます。

更に蘇我山田石川麻呂等の蘇我氏の一族がいます。

蘇我氏は稲目一馬子一蝦夷一入鹿と続く親子が引き継ぐ本宗家の外に馬子には蝦夷以外にもう一人雄当（おまさ）という息子がおり、その子に倉山田石川麻呂・連子・赤兄という子がいます。

蝦夷の筋を大臣家と言ひ、雄当の筋を倉家と呼び、倉家は朝廷の財務担当であったと言われていいます。

倉家の石川麻呂は、蝦夷一入鹿と本宗家の当主（一族の長）が嫡子相続で継ぐのは不当であると考えていました。

当時は大王家もそうですが、豪族の後継当主は兄弟へも移ります。

馬子が蘇我本宗家（当主）を、蝦夷一入鹿の嫡男相続としました。これに倉家一家が反発し、クーデターでは中大兄皇子についたのです。

クーデターの成功は蘇我倉家が味方したことが大きいと言われていいます。

皇極女帝はクーデターを事前に知りませんでした。そして事件後直ぐに退位し、後には弟の孝徳天皇を即位させ政局の安定を図ります。

首謀者で子の中大兄皇子は20歳で天皇には若すぎたのです。その頃の天皇は30歳を過ぎないと推戴されません。

新大王孝徳天皇の下、中大兄皇子、中臣鎌足（後の藤原鎌足）は大化の改新を実行します。

公地公民制による大王専制の中央集権国家をめざします。

後は皇極女帝の重祚（再即位）、中大兄皇子の天智天皇即位と続きます。そして飛鳥時代は元明女帝の平城京遷都（710年）までとなります。

おわりに

今回は歴史上、教科書でも公認されている蘇我氏をとりあげました。この豪族もあまりに古い祖先のことは神話、物語の世界に入ってしまう。

6世紀の稲目から7世紀中頃の入鹿時代までの大臣蘇我氏4代の興隆から滅亡を見てみました。

蘇我氏は古墳時代の終盤から飛鳥時代にかけて、大和大王家と姻戚関係を持ち、後継天皇を決めるにあたって蘇我氏の発言権は強く、蘇我氏の権力基盤を築きました。

推古女帝と聖徳太子（厩戸皇子）が没した後、蝦夷、入鹿親子が最大権力を

握り、聖徳太子の息子である山背大兄王を謀殺しました。

ここで中大兄皇子（後の天智天皇）によるクーデターであっさり蘇我本宗家は滅亡します。

大王家の反発と言えるでしょうが、蘇我一族内での本宗家への反乱の様相も持っています。

その後の蘇我氏についてです。

蝦夷・入鹿の蘇我本宗家が滅亡しましたが、その外の蘇我一族はまだ力を持っていたのですが、本宗家を引き継いだ石川麻呂の筋は皇極天皇の後の孝徳天皇時代に謀反の疑いで失脚し、その外の筋は平安時代を通して石川氏を称しましたが中流貴族止まりでした。

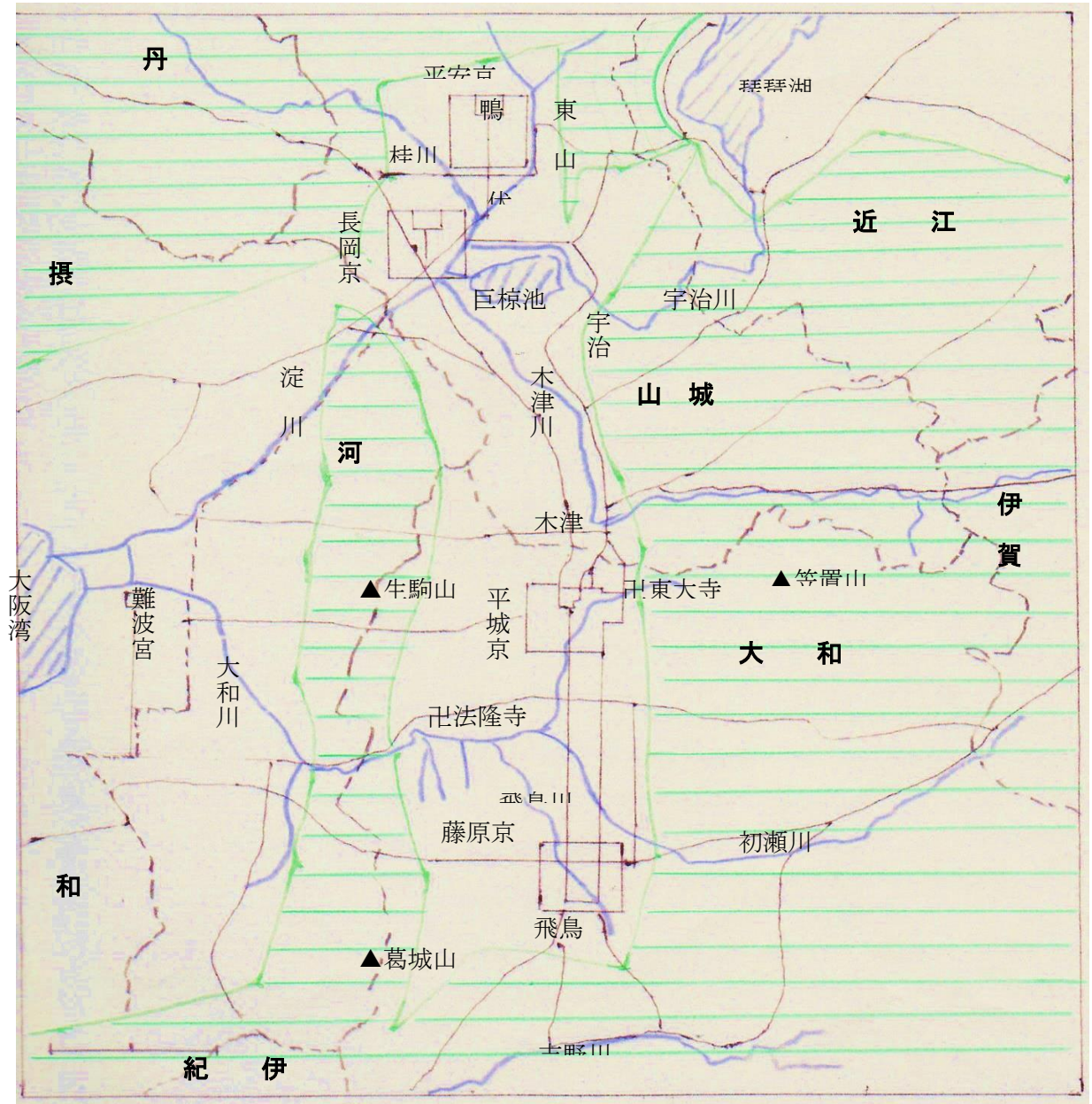
以上

2020年8月11日

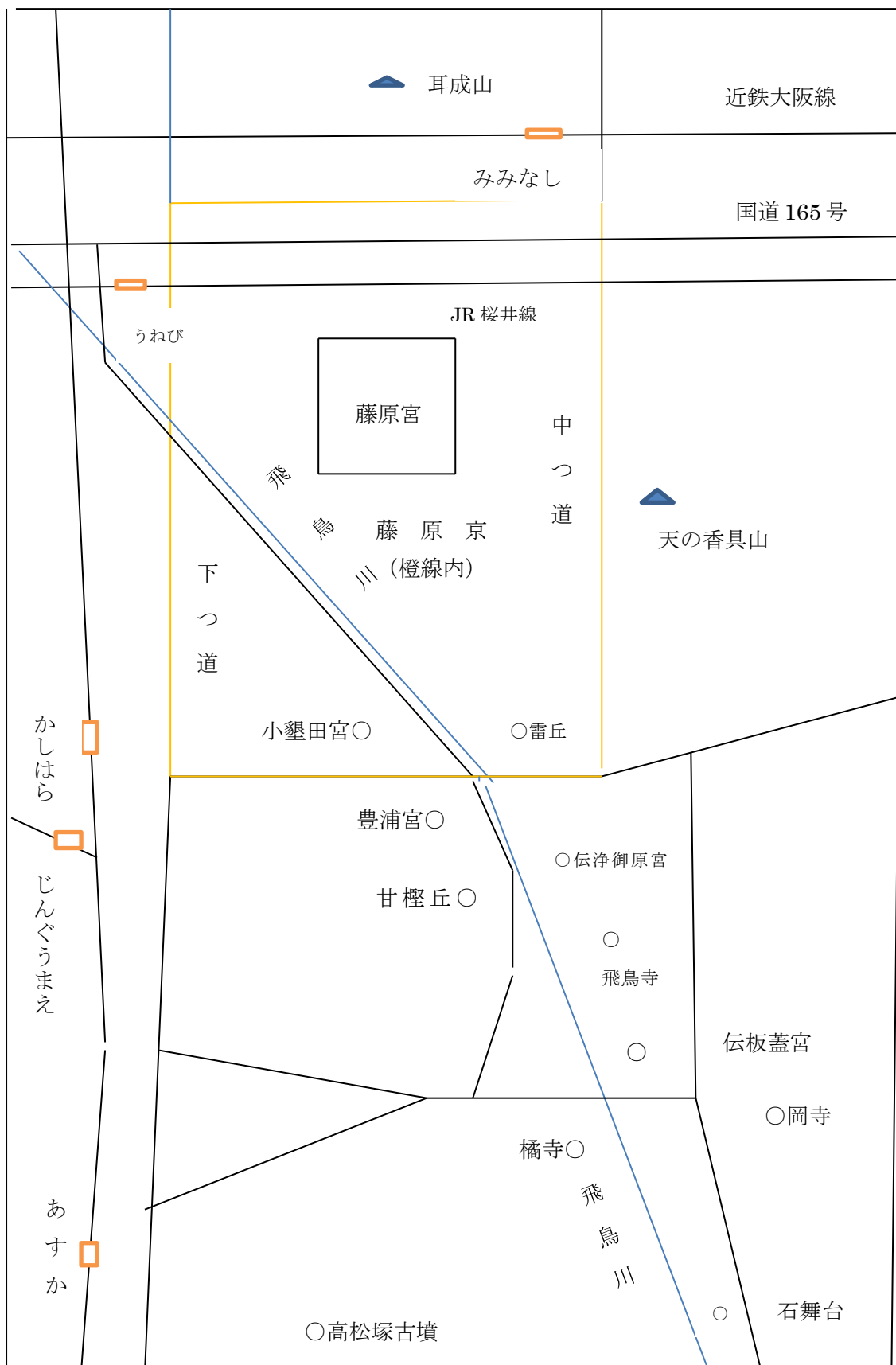
梅 一声

奈良盆地と京都盆地の地勢

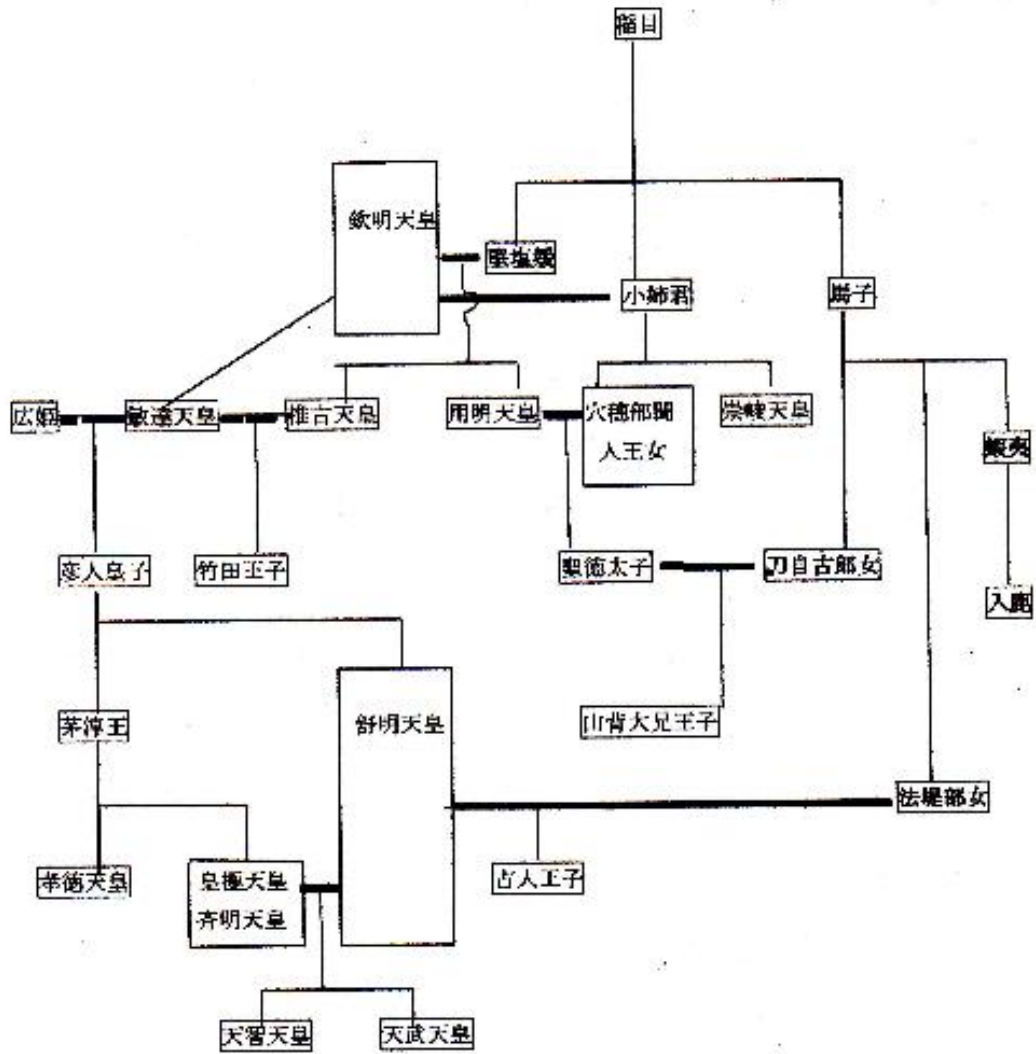
紫線：道路　　緑線：山岳部　　青線：河川・湖・海　　点線：国境



飛鳥・藤原京略図



蘇我氏と天皇家の姻戚系図



蘇我氏と飛鳥時代の文献資料

- 1、蘇我氏の古代 吉村武彦 2015 岩波書店
- 2、飛鳥の古代 湊 哲夫 2015 星雲社
- 3、蘇我氏と大和政権 加藤謙吉 1983 吉川弘文館
- 4、蘇我氏と飛鳥 遠山美都雄 2017 吉川弘文館
- 5、飛鳥 門脇禎二 1970 日本放送出版協会
- 6、飛鳥学総論 河上邦彦・菅谷文則・和田 翠編著 1996 人文書院
- 7、日本の時代史 倭国から日本へ 森公章 2002 吉川弘文館
- 8、国史大辞典
- 9、日本古代の豪族と王権（早大カレッジスクール2018） 加藤謙吉
- 10、日本書紀
- 11、大和王朝の飛鳥・奈良・京都の地勢を見ます（その1） 2014 梅一声ホーム
ページ「閑話そぞろ歩き」
- 12、女王卑弥呼は誰の事 2019 梅一声ホームページ「閑話そぞろ歩き」